

題目:飼育下のシンリンオオカミの行動に影響を及ぼす要素の探索的検討
—札幌市円山動物園で単独で暮らす高齢個体を対象に—

氏名:若生咲帆

指導教員:瀧本彩加

ヒトは長きにわたり動物から多くの恩恵を受けてきたにも関わらず、そうした動物を一方的に利用するだけで、彼らの福祉に配慮しなければならないという意識をなかなか持つてはこなかった。しかし、19世紀ごろから産業動物に対する虐待を防止する法律が整備されるようになり、近年は、産業動物に限らず伴侶動物・実験動物・展示動物など、広くヒトの管理下にある動物の福祉への関心が、社会全体で急速に高まり、広まってきている。展示動物の一種である動物園動物に焦点を当てると、彼らも、他の飼育下の動物と同様に、本来の生息環境とは異なる環境(群れで暮らす動物の単独飼育など)で暮らしていることが多く、野生下では出会うことのない刺激(観客など)に長時間さらされており、常同歩行(往復歩行)などの常同行動が散見されることが問題になっている。加えて、医療技術の発展や知識の集積による動物園動物の高齢化も、近年の懸念事項となっている。高齢個体は、若齢個体に比べ体の衰えなど配慮が必要な側面が多いため、健康寿命を延ばすためにも、高齢個体に焦点を当てた飼育管理手法を考えていく必要があると考えられる。したがって、動物園動物の福祉を向上させるためには、まず、どのような環境要因が当該個体の常同行動の発現に関係しているのかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では、札幌市円山動物園で単独飼育されているシンリンオオカミ(*Canis lupus lycaon*) の高齢個体を対象に行動観察を行い、観客の有無や天候(晴れまたは雪)・季節(秋または冬)といった環境要因が当該個体の常同歩行・通常歩行・休息の発現割合に影響するかを検討した。冬よりも秋の観察期間が極端に短かったため、季節を説明変数から除外することとし、シンリンオオカミの常同歩行の発現の有無に対する観客の有無と天候の影響を検討するため、シンリンオオカミの常同歩行の発現の有無について一般化線形モデルを用いて分析したところ、観客の有無の主効果のみが有意であった。この結果から、観客の有無がシンリンオオカミの常同歩行の発現の有無に影響し、観客がいないときよりもいるときにシンリンオオカミの常同歩行が生じやすい一方で、天候は常同歩行の発現に影響を及ぼすとは言えないことが示唆された。ただし、本研究にはいくつかの問題点があり、単独飼育されているシンリンオオカミの高齢個体における常同行動に特有の環境要因を特定できなかったわけではない。今後、そうした要因が明らかになれば、同様の状況に置かれたシンリンオオカミの福祉向上に向けて適切な環境エンリッチメントを提供することにつながるだろう。